

幼児期の運動遊びの実態と課題

－保育者が指導・援助する上での課題－

大木 みどり 幼児教育科

(2017年10月31日受理)

〔要約〕

本研究では、幼稚園・幼保連携型認定こども園における運動遊びの実態から、保育者が幼児の運動遊びについてどのようなことを課題と捉えているかについて検討した。また、運動遊びを援助する上での保育者自身の課題についても検討した。

結果については以下の通りである。

- (1) 園庭・遊戯室・保育室で行われている運動遊びは、それぞれの空間特性を活かした活動内容となっている。課題としては安全な空間の使い方への配慮等が挙げられている。
- (2) 幼児の運動遊びの課題としては、幼児自身の苦手意識、運動遊び（生活経験）の不足、発達に応じた運動遊び、遊びの内容・展開、安全確保、環境構成・整備、運動能力の個人差などが挙げられている。
- (3) 保育者の運動遊びの指導・援助をする上での課題としては、年齢・発達に合わせた活動内容、指導の順序やポイント、保育者も共に楽しむ、楽しさを感じる援助、苦手意識を持った子への対応・教え方、安全対策・危険防止、意欲を引き出すための方法などが挙げられている。

I. はじめに

現代は科学技術の進歩、高度情報化、国際化、少子高齢化等社会状況は大きく変化し、労働環境や労働形態の変化による経済格差の拡大や幼児の貧困なども問題視されている。また核家族化や共働き世帯の増加等により子育ての環境も変化している。

子どもについても基本的な生活習慣の乱れや食習慣の乱れ、運動能力の低下やコミュニケーション能力の不足等の様々な問題が指摘されている。

このような変化を背景に幼児期の遊びもゲームやテレビ・DVD視聴等の室内遊びが多くなり、運動遊びの減少が懸念されている。文部科学省が平成19年から平成21年に行った「体力向上を培うための幼児期における実践活動のあり方に関する調査研究」^(註1)にも幼児の体を動かす機会の減少傾向がうかがえる結果が報告されている。

幼児期の身体活動・運動遊びについては、以前から「遊ぶ空間（場所）、遊ぶ仲間、遊ぶ時間」の3間の減少が指摘され、また交通事故や犯罪の危険性が懸念される中、屋外で思い切り体を使って仲間と遊ぶことも少なくなり、結果として幼児期の様々な運動遊びを通じた多様な動きの獲得や体力・運動能力などにもマイナスの影響を及ぼしている現状がある。

特に成長が著しい乳幼児期における身体的な活動、運動遊びの果たす役割は大きく、身体的な発育や発達に関係するだけでなく、知的な面や社会的な面、情緒的な面など、心身の健康にも大きく影響を与えるものである。

幼児期はその後の人生を豊かに歩むための基礎作りの時期であり、生きる力を育むことが幼児期の保育・教育のねらいとなっている。

幼稚園教育要領^(註2)・保育所保育指針^(註3)・幼保連携型認定こども園教育・保育要領^(註4)の健康の領域のねらい（3歳以上児）においても「(2)自分の体を十分に動かし、進んで運動しようとする」と記され、内容については「(2)いろいろな遊びの中で十分に体を動かす。(3)進んで戸外で遊ぶ。」、内容の取扱いでは「(1)心と体の健康は相互に密接な関連があるものであることを踏まえ、幼児が教師や他の幼児との温かい触れ合いの中で自己の存在感や充実感を味わうことを基盤として、しなやかな心と体の発達を促すこと、特に十分に体を動かす気持ちよさを体験し、自ら体を動かそうとする意欲が育つようにすること」「(2)様々な遊びの中で、幼児が興味や関心、能力に応じて全身を使って活動することにより、体を動かす楽しさを味わい、自分の体を大切にしようとする気持ちが育つよ

うにすること。その際、多様な経験をする中で体の動きを調整するようにすること」と記されている。このように幼児期の身体活動・運動遊びは心身の健全な発育発達のみならず、物事に取り組む積極的な態度や意欲を育み、その後の人生を豊かに生きるための基礎を作る重要なものと考えられる。

また平成24年に文部科学省により「幼児期運動指針」^(註5)が策定されている。策定の背景として現代の子どもの身体活動・運動遊びについて主な問題点として4つが挙げられている。一つには活発に体を動かす遊びの減少、二つには体の操作が未熟な幼児の増加、三つには自発的な運動の機会の減少、四つには体を動かす機会の減少である。

これらの状況を改善するために幼児の発達の特性に配慮しながら幼児が多様な運動経験ができる機会を保障し、個々の幼児の興味や生活経験に応じた、幼児が主体的に遊ぶことができるような様々な環境を整え支援していくことが求められることが記されている。また、多くの幼児が体を動かす実現可能な時間として「毎日、合計60分以上」の目安も示されている。

しかし、家庭や地域において、幼児が安全に安心して充実した運動遊びを行う空間的・物的・人的良好な環境を整えることはますます困難になっていくことが推察される。

このような現状を踏まえ、就学前にほとんどの幼児が利用する幼稚園・保育園・認定こども園は、個々の幼児の成長・発達に適した運動経験の場としての役割は非常に大きいものと考えられる。

保育者は個々の幼児の発育・発達や興味を考慮し、主体的な運動遊びを引き出す環境を整え、充実した遊びが展開するための援助を行っていく。このため保育者の運動遊びの捉え方、関わり方が活動の内容や展開、活動の充実度に大きく影響してることが考えられる。

本研究では主に運動遊びが行われる園庭・遊戯室・保育室における遊びの実態と空間環境としての課題を探る。また、保育者は日々幼児と関わる中で、幼児の運動遊びの実態や課題をどのように捉えているのか、さらに運動遊びを指導・援助する上でどのようなことを課題と捉えているのかについて探る。

II. 研究の目的と方法

＜研究の目的＞

1. 幼稚園・認定こども園における園庭・遊戯室・保育室での幼児の運動遊びの実態・課題について明らかにする。
2. 幼児の運動遊びの実態について、保育者がどのようなことを課題として捉えているのかについて明らか

かにする。

3. 幼児の運動遊びを指導・援助する上での保育者の課題について明らかにする。

上記の目的のために、本学（羽陽学園短期大学）附属幼稚園・幼保連携型認定こども園（幼稚園・保育園）の保育者に「幼稚園・認定こども園における運動遊びの実態と課題」についてのアンケート調査を実施した。

＜研究の方法と手続き＞

1. アンケート調査について（対象園・対象者のプロフィールと手続き）

(1) 対象園

①本学（羽陽学園短期大学）には附属幼稚園3園と附属幼保連携型認定こども園（幼稚園・保育園）の5施設があり、幼稚園では2歳児から5歳児までの幼児が、幼保連携型認定こども園では1号認定から・2号認定・3号認定の幼児が入園している。

②運動遊びを行う環境として各園には、一般的な固定遊具が設置され、運動会などの行事ができる広さのある園庭、お遊戯会など様々な行事や活動にも利用される遊技室、各年次のクラスごとの保育室がある。

(2) アンケート対象者

アンケートは本学（羽陽学園短期大学）附属各園に勤務する保育者を対象として実施した。回答人数は30名である。回答した保育者の担当は年長クラス8名、年中クラス7名、年少クラス8名、2歳児クラス4名、主任教諭3名である。

(3) アンケート実施の手続き

平成26年5月初旬に各園にアンケート調査用紙を配布し、5月下旬に回収した。

2. アンケート調査の内容

各園の園庭、遊戯室、保育室における自由遊び時及び設定保育時の幼児の運動遊びの内容について、特に年齢別に遊びを区別せず、各保育者が観察した内容及び実践した内容についての自由記述によるアンケートと、幼児の運動遊びにおける問題・課題及び保育者自身の運動遊びを指導・援助するうえでの課題についての自由記述によるアンケートを実施した。

このアンケートは「幼稚園・認定こども園における運動遊びの実態と課題」として実施した。

アンケート調査の内容は、以下のとおりである。

1. 幼稚園・認定こども園における運動遊びの実態と課題（園庭）

＜実態＞

- ＜課題＞
- 2. 幼稚園・認定こども園における運動遊びの実態と課題（遊戯室）
 - ＜実態＞
 - ＜課題＞
- 3. 幼稚園・認定こども園における運動遊びの実態と課題（保育室）
 - ＜実態＞
 - ＜課題＞
- 4. 幼児の運動遊び全体から見える問題
- 5. 幼児の運動遊びを援助するうえでの課題

Ⅲ. 結果と考察

1. 幼児の活動場所における運動遊びの実態と課題

各園における幼児の主な活動場所である園庭、遊戯室、保育室において、どのような遊びが行われ、どのような課題があるのか、自由遊び時、及び設定保育時におけるそれぞれの場所の遊びの実態と課題について見ていく。

(1) 園庭における遊びの内容と課題

表1は、5つの園の園庭において自由遊び時、及び設定保育時に実際に行われている運動遊び・遊びについて表したものである。

表1：園庭で行われている遊び

	遊びの内容
1	固定遊具遊び
2	かけっこ遊び
3	ボール遊び
4	集団遊び
5	ごっこ遊び
6	縄遊び
7	移動遊具遊び
8	砂遊び
9	築山での遊び
10	自然の遊び
11	散歩

表1より、園庭で行われている運動遊びは、鉄棒や滑り台、ブランコやジャングルジム、雲梯、登り棒等の固定遊具遊び、かけっこやリレー遊び、サッカー・ドッジボール等のボール遊び、氷鬼やバナナ鬼、高鬼やハンターごっこ等の鬼ごっこを中心とした集団遊び、縄遊びなどである。また運動遊び以外の自然と関わる遊び等も行われている。

園庭における運動遊びの環境面での課題については、様々な年齢の子どもが遊んでいるため、ぶつかる等のトラブルやケガにも注意が必要なこと、遊具の管理や

事故等の安全面の課題や保育者の配置等の人的な環境面も課題として挙げている。

活動面では異年齢児が混じり合って活動することから、活動の内容や空間の使い方への配慮が必要なこと、また異年齢児と一緒に集団遊びを行う際のルール決め方等についても課題として挙げている。

活動内容については、同じような遊びを繰り返し行うことが多く見られ、活動が発展したり他の遊びへ展開していかないことなども課題となっている。

園庭は広い空間で幼児も開放され、友達と共に様々な遊びを主体的に展開していくことが期待できる。また集団遊び等を通し異年齢児との交流が図られ、思いやり等の学びの機会ともなる。一方、年齢による遊びの内容やルールの違いや安全な空間の使い方への配慮等、保育者の適切な援助や対応も求められ、園全体としての共通理解の上で行われることが重要となると思われる。

また自由遊び等においては運動遊びだけでなく虫探しや草花遊び等、自然と関わる遊び、園庭内の散歩など様々な遊びを行うことができる空間であり、遊びの創造、発展、交流の場所としての価値は大きいものと考えられる。そのためにも幼児の主体的な遊びを引き出す遊具を含めた環境作りが大切となる。

(2) 遊戯室における遊びの内容と課題

表2は遊戯室において自由遊び時、及び設定保育時に実際に行われている運動遊び・遊びについて表したものである。

表2：遊戯室で行われている遊び

	遊びの内容
1	ボール遊び
2	縄遊び
3	フープ遊び
4	大型遊具遊び
5	サーキット遊び
6	かけっこ
7	集団遊び
8	体操・ダンス
9	表現遊び
10	ごっこ遊び
11	ブロック遊び

表2より、遊戯室で行われている運動遊びは、ボール・縄・フープ等などの遊具を使っての遊びやマットや跳び箱、平均台、鉄棒など大型遊具を使っての遊び、かけっこや様々な鬼ごっこ・戦いごっこなどの集団遊び、短縄・長縄での遊びなど、園庭と変わらない遊び

が行われている。

園庭とは違った遊戯室での遊びとして、大型遊具を組み合わせたサーキット遊びや曲に合わせて踊るダンスやリトミック、表現遊びなどが行われている。また大型ブロックやソフトブロックを使ったブロック遊びも行われている。

同じ空間でボール遊びと集団遊びが行われるため、遊びごとの空間の確保や有効な使い方、安全への対策等が課題として挙げられている。

運動遊びの内容としては園庭と同じような遊びが行われているが、より狭い空間での遊びとなるため様々な工夫が求められる。

遊戯室は園庭より狭い空間であるため、ほぼ同じ遊びが行われていることを考えると、幼児の遊びを極端に制限することなく充分に楽しく活動できるような、効率的で安全な使い方の工夫が求められる。しかし、遊戯室だからこその活動もあり、空間の特徴を活かした遊びやルールなど保育者の指導や援助も重要となるものと思われる。

(3) 保育室における遊びの内容と課題

表3は保育室において自由遊び時、及び設定保育時に実際に行われている運動遊び・遊びについて表したものである。

表3：保育室で行われている遊び

	遊びの内容
1	ボール遊び
2	縄遊び
3	フープ遊び
4	集団遊び
5	ダンス
6	遊具遊び
7	ごっこ遊び
8	ブロック遊び
9	制作遊び
10	塗り絵
11	粘土
12	パズル
13	絵描き

表3より保育室での運動遊びは、ボール・縄・フープなどの遊具を使っの遊びや集団遊びやダンス等も行われているが、園庭や遊戯室と比べるとさらに狭い空間であるため運動遊びはあまり行われていない。運動遊び以外の製作遊びや塗り絵、パズル、粘土、お絵かき、また、ままごとや幼稚園ごっこなどのごっこ遊びが多く行われている。

遊びの課題としては、狭いことから遊びの空間の確

保や遊びのマナー化、狭い部屋での遊びのストレスからくるトラブル等の課題を挙げている。

保育室は幼児が自分のクラスとして理解しており、安心して遊ぶことのできる空間と考えられる。運動遊びが十分に出来る空間とは言い難いが、幼児の好きな遊びを行うことができる。また保育者と幼児の関わりが深まることも期待できる。

このように各園における運動遊びは、園庭、遊戯室、保育室それぞれの場所の特性を活かして多様な遊びが行われている。幼児期の保育・教育は環境を通して行うということは各要領や指針においても変わらない基本的な考え方である。

幼児の主体的な遊びが生まれ、発展していくためには園内の空間的、物的、人的環境の整備、充実は日常的に行っていくことが求められる。

これには毎日幼児と生活や遊びを共にしている保育者の果たす役割は重要となる。^(註6) 幼児の発達や興味、毎日の幼児の遊びの実態を把握し、課題を探り、保育者同士の情報の共有化を図りながらより良い環境を整えていくことが重要となる。

2. 幼児の運動遊びの課題

保育者は毎日の幼児の運動遊びを共に体験また観察する中で、どのように捉えているのかについて、アンケートの回答（複数回答）結果からまとめるとおおよそ以下の項目になる。

表4：幼児の運動遊びの課題

	幼児の運動遊びの課題項目	回答数
1	苦手意識	15
2	運動遊びの経験（生活経験）不足	7
3	発達段階に応じた運動遊び	5
4	遊びの内容・展開	5
5	安全確保	4
6	環境構成・整備	3
7	運動能力の個人差	3

表4より、保育者が幼児の運動遊びの課題として最も多く挙げているのは、「苦手意識」（回答数15）で、次に「運動遊び経験（生活経験）の不足」（回答数7）、「発達段階に応じた運動遊び」（回答数5）、「遊びの内容・展開」（回答数5）、「安全確保」（回答数4）、「環境構成・整備」（回答数3）、「運動能力の個人差」（回答数3）となっている。これらについては、上記で指摘したように社会的環境の大きな変化が幼児の生活環境にも影響を与え、日常生活体験の不足や運動遊びの減少を背景にして起こってきたものと考えられる。

それぞれの項目について、具体的にどのような内容について保育者が課題と捉えているのかについて見ていく。

以下に示すのは、幼児の運動遊びについて、保育者が課題として捉えた内容である。

(1) 苦手意識 (回答数15)

- ①運動遊びや苦手なことには中々取り組めない。
- ②得意なことは自分から進んで取り組む姿が見られるが、苦手なこと・興味のないこと・失敗した時等は中々取り組めずにいることがある。
- ③一人ひとりの運動能力の違い→鬼ごっこやかけっこなどでは、「走るのが苦手だから」と遊びに入らない幼児がいる。
- ④苦手意識のある幼児への対応
- ⑤集団遊びは友だちと楽しむことができるが、縄跳びなどの個人の運動遊びになると他の友だちと比べて苦手意識を持つ子が多い。
- ⑥子ども達の様子から、普段から体を動かすことを好んでいる子は、クラス活動や行事などでも、積極的に運動遊びを楽しんでいる。しかし、保育室で主に遊ぶ子は運動遊びにあまり加わらない。かたわらで関わりを工夫しながら「やりたい」と思えるよう援助もしてみるが、苦手意識を持っていたり、興味がわかenかったりする子もいる。
- ⑦自分の好きなかけっこ、縄跳び、ボール遊び、鉄棒をじっくり楽しむ姿が見られるが、苦手なものへ取り組めずにいる姿も多く見られる。きっかけ作りをしていくことが大切だが上手くないことが多く難しい。
- ⑧運動が苦手な子の意欲の高め方・年齢に合わせた運動遊びを取り入れているか。
- ⑨身体能力は個人差もある為、苦手意識に繋がることも考えられる。
- ⑩いつも同じ子が同じ遊びをする傾向がある。(得意、不得意があるのだと思う)
- ⑪運動に興味がある幼児とそうでない幼児、体を動かすことが好きな幼児とそうでない幼児など、気持ちの持ち方によって活動への参加意欲は変わると思う。だから、幼児が興味を持つような運動遊びを教師は紹介し、取り入れていく必要があると思う。
- ⑫運動の好きさによる運動量の差の捉え方。
- ⑬自由に運動遊びを楽しむことが多いため、興味のある幼児は積極的に参加しているが、他の遊びに集中している幼児は経験しないという問題も出てくる。
- ⑭頑張りとうとう思う幼児は進んで行く姿はあるものの、興味は向けられない幼児は、自らは一切挑戦しようとしなない様子がある。一人ひとりが楽しみながら体を動かせるようになってもらいたい。(年中)
- ⑮周りに合わせて楽しく踊る幼児もいれば、それが恥ずかしくて踊りたがらない幼児もいる。保育者の援助のまま動く幼児もいれば、嫌がり手を振り払う幼児もいる。

幼児の運動遊びに対する苦手意識については回答数も多く「得意なことは自分から進んで取り組む姿が見られるが、苦手なこと・興味のないこと・失敗した時等は中々取り組めずにいることがある。」「鬼ごっこやかけっこなどでは、「走るのが苦手だから」と遊びに入らない幼児がいる」「縄跳びなどの個人の運動遊び

になると他の友だちと比べて苦手意識を持つ子が多い」等、好きなことには積極的に取り組むが、できないことや、なかなか興味の持てないことには苦手意識を持つ幼児の多いことが指摘されている。この結果、運動遊びについての体験の差が出てくることにより、それぞれの年齢において獲得されるべき体力や運動能力をはじめ、運動遊びの中で培われる社会性や創造性なども十分に獲得できないことも推察される。

幼児の運動遊びへ向かう主体的な気持ちを引き出すための環境構成や保育者の関わりの工夫が求められる。

(2) 運動遊びの経験 (生活経験) 不足 (回答数7)

- * 転び方が下手・手が出ない・けがが大きくなる・体力がない
- ①全体的に経験不足が感じられる。
 - ②体力のない子が多い。転び方が下手でけがが大きくなる。(年長)
 - ③運動不足からなのか、転んだり、ぶつかってけがをすることが多い。
 - ④普段の生活や遊びの中で長い距離を歩いたり、リレーや鬼ごっこなど走る経験が少ないように感じる。
 - ⑤自分の体の使い方が分からない。転び方が危ない。
 - ⑥築山を登ったり降りたりする中で、すぐに転ぶ幼児が増えてきているように感じる。また、転ぶ時手が出なく、顔を打ち付けたりする幼児もいる。(年長)
 - ⑦今年度は5歳児も少なく、遊びを盛り上げたり、引っぱってくれる子も少ない。また集団生活の経験も短いせいか、様々なことで経験不足の様子が見られる。(ブランコがこげない、スクターに乗れない等)

運動遊びの経験 (生活経験) 不足については、「運動不足からなのか、転んだり、ぶつかってけがをすることが多い。」「自分の体の使い方が分からない。転び方が危ない。」「すぐに転ぶ幼児が増えてきているように感じる。また、「転ぶ時手が出なく、顔を打ち付けたりする幼児もいる。(年長)」「様々なことで経験不足の様子が見られる。(ブランコがこげない、スクターに乗れない等)」等、幼児の遊びから生活体験を含め、運動遊びの経験不足からうまく体をコントロールすることができず、すぐに転んだり、転んでも手が出ない等の課題が指摘されている。年長児でもブランコがうまくこげない等、固定遊具の使い方遊び方にも経験不足を感じていることがうかがえる。

(3) 発達段階に応じた運動遊び (回答数5)

- ①発達段階に応じた運動遊びをしていく必要がある。(自分の体をコントロールできるように。バランス感覚、スピードやリズム、動き等)
- ②未満期の段階でハイハイを多く経験していると思うが、3歳児の遊びの中でハイハイをしてもうまく出来ない子もいる。また、転んでも手が出なかったり足がもつれて転ぶ子が多い。(小さい子は内股の子が多い)

- ③頭が大きくバランスも取り難い年少児はよく転び、ぶつかったら前にも後ろにも転んでしまう。(年少)
- ④縄跳び・ダンスでも、リズム感がない、あるいはどう動いていいかわからない。
走る時すり足が多い。階段でも足を軽く上げられない。
- ⑤遊びのルールや決まり等を理解する力で、遊びへの参加意欲は変わってしまう。

発達段階に応じた運動遊びについては、「3歳児の遊びの中でハイハイをしてもうまく出来ない子もある。」等、未満児から年長児までそれぞれの発達段階で体験し身につけるべきバランス感覚やリズム感、自分の体をコントロールする力、体力等、様々な能力が充分身につけていない現状が指摘されている。

(4) 遊びの内容・展開 (回答数5)

- ①継続した遊び→遊びが継続できず飽きてしまう場合がある。
- ②一つの遊び道具や玩具での遊び方に種類がない。(特にカラー積み木・ソフトブロック等)
- ③全体的に遊びがワンパターンになりがちになっている。
- ④ルールや決まり等、共通理解している必要がある。
- ⑤周りの幼児との物の貸し借りがまだ上手にできない。
そのため幼児同士のトラブルも発生し易い。

遊びの内容・展開については、「遊びが継続できず飽きてしまう」「一つの遊び道具や玩具での遊び方に種類がない」「全体的に遊びがワンパターンになりがち」等、幼児の遊びが発展していかず、パターン化している点を課題としてあげている。特に低年齢の幼児は一つの活動に長時間集中して取り組むことは難しいと考えられる。環境構成や保育者の働きかけ等が求められるものと考えられる。

(5) 安全確保 (回答数4)

- ①安全確保→ケガ等、保護者の方への報告をきちんとする必要がある。毎日のようにけがをすることが続くこと信頼を失うきっかけにもなることが予想される。
- ②遊戯室を開放するにしろ、保育者がついてみていなければならぬため、人手が必要になる。
- ③教師が一緒についていないと、危ない場面になったり遊びが長く続かない。
- ④危険と見取れないためか、ブランコで遊んでいる人に近づいたりする姿も見られる。

幼児の運動遊びにおける安全確保については、「危険と見取れないためか、ブランコで遊んでいる人に近づいたりする姿も見られる」等、年齢が低い幼児については視覚の問題や自己中心的な段階にあることから、危険を認識することが十分でないことが考えられる。

幼児の問題だけでなく、保育者の援助や安全な環境

整備の必要性も指摘している。

(6) 環境構成・整備 (回答数3)

- ①遊具などの確保。保育者の工夫。
- ②雨天時の運動遊びの楽しみ方。
- ③ボール遊びで年長・年中・年少児混合で遊ぶことが多いが、年長・年中児の動きに年少児がついていけないので、それに対する配慮が必要。

環境構成・整備については、「遊具などの確保」等の物的環境や異年齢児が同時に遊ぶことによる空間の確保や遊ぶ内容や遊び方の工夫、またさらに混雑が予想される雨天時の運動遊びの楽しみ方等が課題として挙げられている。幼児の課題というよりは保育者側の課題といえる。

(7) 運動能力の個人差 (回答数3)

- ①かけっこの一斉での運動遊びを行ってみて、個人差が大きく、足が速かったり、走るフォームが2歳児としてはできていない幼児もいる一方で、膝が曲がらなかったり、腕が振れない等の幼児もいる。入園までの環境の違いが大きく表れているようだ。(公園での遊びの経験・散歩等)(2歳児)
- ②幼児それぞれの身体機能(運動能力)に応じた遊びを進め、展開していく際、個人差を十分に配慮してることが必要だと思うが、配慮し過ぎるとつまらなさを感じたり、運動することがいやになってしまう等のことも考えられるのではないか。
- ③からだの使い方が分からない子もいる。個人差が大きいためどの様に子どもに伝えていくのか、教師側の課題がある。

運動能力の個人差については、年齢が低いほど経験の差は顕著に表れ、特に2歳児については入園までの生活体験、運動体験の経験の差が見られるようである。また同年齢でも個々の幼児の身体機能・運動能力にも差が見られ、遊びの内容や経験の差などの影響が考えられる。また個人差への対応についても苦慮している様子がうかがえる。

その他として、「どこからが運動遊びなのか、私自身理解できていない部分もあるため、今後は学ばなければならないと感じている。」「年少組の内は、運動遊びと呼べるようなものは行っていないのが現状である。」「運動遊び=年長児というイメージが強い。年齢の低い学年にどの様に教えていったらいいのかが分からない」等「運動遊び」の内容の捉え方についての保育者自身の課題が挙げられている。運動遊びを年長児のサッカーやドッジボール、逆上がりや跳び箱跳び等ダイナミックな活動として捉えるのではなく、日常生活で行われる散歩やかけっこ等、様々な身体的な活動なども含め広く捉えていく必要がある。

3. 幼児の運動遊びを援助する上での課題

幼児の運動遊びの実態から、幼児が抱える課題について探ってきたが、幼児の運動遊びの環境を整え、指導・援助するために、保育者自身はどのような課題を持っているのか。保育者の幼児の運動遊びを指導、援助する上での課題について探っていく。

保育者自身の運動遊びを指導・援助する上での課題について、アンケートの回答（複数回答）結果からまとめるとおおよそ以下の項目になる。

表5：運動遊びを指導・援助する上での保育者の課題

	幼児の運動遊びの課題項目	回答数
1	年齢・発達に合わせた活動内容、指導の順序やポイント	21
2	保育者も共に楽しむ、楽しさを感じる援助	8
3	苦手意識を持った子への対応・教え方	8
4	安全対策・危険防止	7
5	意欲を引き出すための方法	6

表5より、保育者が幼児の運動遊びを指導・援助する上での課題として挙げたもので最も多いのは「年齢・発達に合わせた活動内容、指導の順序やポイント」（回答数21）である。次に「保育者も共に楽しむ、楽しさを感じる援助」（回答数8）、「苦手意識を持った子への対応・教え方」（回答数8）、「安全対策・危険防止」（回答数7）、「意欲を引き出すための方法」（回答数6）となっている。これらは、幼児の運動遊びの課題で挙げられた内容を踏まえたものとなっている。また課題と共にどのように対応していくかについても述べているものも見られる。

以下に示すのは、幼児の運動遊びを援助・指導する上で、保育者が課題として捉えている具体的な内容について表したものである。

(1) 年齢・発達に合わせた活動内容、指導の仕方、プロセスの把握、順序や指導のポイント（回答数21）

- ①運動遊びに意欲を持ち、好きになるような指導の順序やポイントがあれば教えてほしい。
- ②正しい補助の仕方や指導の仕方。
- ③跳び箱を上手く跳ばせたり、鉄棒の逆上がりができるようになるためには。幼児にも恐怖心があったり、保育者がどう伝えようと幼児に分かり易いのか模索中のためそこが課題である。
- ④マット運動、跳び箱、鉄棒等を使った年齢に合わせた指導の仕方を知りたい。
- ⑤運動をする上で導入の方法や段階指導の仕方を知りたい。
- ⑥その年齢や季節等に合った運動遊びを学ぶこと。
- ⑦マット運動等の動きを補助する際に、適切な補助がきているか、どのような段階を踏んで指導すれば良いのか（自己流なので）課題である。

- ⑧本園では跳び箱や鉄棒等の指導を行っている。特に年長の保育者は幼児の意欲を起こしたり、持続させながら指導を行わなければならない。また正しい指導法など、知識として取得しなければならないと思う。学年に合った運動遊びを楽しめるよう学んで、幼児と楽しんでいきたい。
- ⑨ルールや決まりについて、その都度知らせたり、学年によってルールを変える等の配慮が必要。声がけや援助を必要に応じて行っていく。
- ⑩子どもの発達に応じて、こういうことができるようになるためには、どう段階を踏んでいったらいいのかを保育者自身が理解して設定したり、保育者の意図を明確にして援助していかなければならない。そのためには保育者自身の運動遊びに対する知識もきちんと持っておかなければならない。
- ⑪身のこなしがいろいろできるよう様々な体験をさせる。
- ⑫姿勢の悪い子は走り方も遅いように感じるので、活動において姿勢をよくするように気を付ける。
- ⑬足腰を鍛えるために出来ることを考えていかなければならない。
- ⑭玩具や遊具を上手く貸し借りするためにはどのような援助や配慮が必要か。
- ⑮ボール遊びでは学年混合でも遊べるようにどのような言葉掛けや配慮が必要か。
- ⑯個人的よりも全体で走ったり、体を動かす機会を遊びの中で行っていく。
- ⑰子どもの持っている力を引き出していきたい。
- ⑱ダンスを行う時もリズム感がある子とない子の動きが違い、リズムに乗れば動けることもあるので、リズム感を鍛えられるような遊び、関わりをしたい。
- ⑲年少組のうちはどんな遊びを行うことが望ましいのか、また、必ず運動遊びは取り入れなければならないのか、子どもへの影響等、指導・援助する立場としてあまり知らないのを知りたいと思う。
- ⑳問題点から、体力がなく、経験不足な様子が見られ、昔と今では子どもの姿が変わってきている。その経験不足を解消するために、どうしたらいいかを考えて取り組んでいく必要がある。
- ㉑クラス活動だけでなく自由遊びの時間から集団遊びやリレーごっこ、縄遊び等、体を動かして遊ぶ経験を増やしていく。

幼児の運動遊びを援助する上での課題として回答数が最も多いのは、年齢・発達に合わせた活動内容、指導の順序やポイントである。マットや鉄棒、跳び箱などの器械運動遊びについては「マット運動、跳び箱、鉄棒等を使った年齢に合わせた指導の仕方を知りたい」「運動をする上で導入の方法や段階指導の仕方を知りたい」、「正しい補助の仕方や指導の仕方」等の課題が挙げられている。

それぞれの遊具を使用した活動については、マットであれば前転や後転、鉄棒であれば逆上がり、跳び箱であれば腕立て開脚跳び何段等、マット運動にあまりこだわることなく行うことが大切と考える。それぞれの遊具との関わり、幼児自身ができる活動を自分がかたたくさん見つけていくことができるかに焦点を当てて活動を行うほうが、幼児があまり苦手意識を持た

ずに楽しみながら取り組むことができるものと考えられる。このような多様な動きを伴う遊びを通して、自分自身の体をコントロールする力や自分を支える力、回転する感覚、バランス感覚などが育って行く。これらの体験の積み重ねの上に前転や後転、逆上がりや腕立て開脚跳び等様々な技ができるようになっていく。幼児の活動の状況を見ながら、個々に合わせた目標を設定し活動を進めることが重要と考えられる。

また、「身のこなしがいろいろできるよう様々な体験をさせる」、「足腰を鍛えるために出来ることを考えていかなければならない」「リズム感を鍛えられるような遊び、関わりをしたい。」等、身のこなしや足腰を鍛えること、リズム感を養うことも、そのための特別な活動を準備するというよりは、普段の様々な遊びにおいても保育者が意識して活動を援助することで育っていくものと思われる。

人間の脳は生後2か月から3～4歳頃までに急激な発達を遂げて7割ほど出来上がり、10歳頃までにはほぼ完成するといわれている。^(註7) この神経系の発達の著しい時期に多様な運動を経験することは体内の神経回路を複雑には張り巡らすことになり、調整力、バランス感覚、リズム感、巧緻性など、身体をコントロールする能力、スムーズな身体運動の獲得へと繋がっていくものと考えられる。

(2) 保育者も共に楽しむ・楽しさを感じる援助（頑張る姿を認め、ほめる）（回答数8）

- ①出来るだけ教師も遊びに参加し、一緒に楽しむ（個人的に）。
- ②鉄棒や太鼓橋などの四肢を使って遊ぶものは、出来たことが自信につながるので頑張る姿も認めほめていく。
- ③（例えばかけっこごっこや追いかっこ、表現遊び等）それらを楽しんで行えるよう、保育者と遊びながら楽しさを実感していく。
- ④楽しみながら体を動かせること、発散させることを考えていきたい。
- ⑤運動遊びに興味を持ち、継続して楽しめるような教師の関わり方。
- ⑥運動ということを強調せずに、“遊び”ということを私達も意識しながら遊べるようにしていけたらと思う。
- ⑦友だちや保育者との関わりが深まるような遊び、一方的でなく共同的になるようなサポートをしたい。
- ⑧保育者主体（「こうするんだよ」「こっちの一人来て」等）になると、幼児主体の遊びではなくなり、あまり盛り上がりえず終わるので注意する。

保育者も共に楽しむ、楽しさを感じる援助については、「保育者と遊びながら楽しさを実感していく。」「鉄棒や太鼓橋などの四肢を使って遊ぶものは、出来

たことが自信につながるので頑張る姿も認めほめていく。」等、保育者自身が幼児と共に活動を楽しみ、幼児の頑張りをほめ、自信につながるような援助の必要性をあげている。

(3) 苦手意識を持った子への対応・教え方（回答数8）

- ①運動遊びが苦手な幼児への援助の仕方。
- ②苦手意識のある子どもへの配慮、援助。また、友だちの前で何かをやるということも、子どもによっては苦痛に感じることもある。なるべくたくさんの経験をさせてあげたいと思うが、時間の使い方や伝え方等学んでいきたい。
- ③苦手意識のある幼児や参加したがる幼児への対応の仕方。個々の運動能力を踏まえた上での全体指導。
- ④運動遊びに苦手意識があったり、経験不足の子への対応。
- ⑤ボール遊びや縄遊び等に苦手意識を持っている幼児には、ボールや縄とびに親しみを持ってもらえるようにしたいが、方法が分からないため働きかけることができずにいる。勉強不足な点も課題である。
- ⑥跳び箱や縄跳び等、幼児が苦手意識を持たずに取り組めるような、スモールステップでの指導の仕方が知りたい。
- ⑦運動に対する苦手意識を感じないような指導方法や活動内容をどの様にするか。
- ⑧苦手な子への教え方が難しい。コツをつかむとスムーズにいくが、そこまでの指導に悩む。また「やりたくない」という子に対して、気持ちの面で「やりたい」とするにはどうしたらよいか。

苦手意識を持った子への対応・教え方については、運動遊びは好き嫌いもあり、苦手意識を持つ幼児も多いことが推察される。「運動遊びが苦手な幼児への援助の仕方。」「運動に対する苦手意識を感じないような指導方法や活動内容をどの様にするか。」「跳び箱や縄跳び等、幼児が苦手意識を持たずに取り組めるような、スモールステップでの指導の仕方が知りたい。」等、苦手意識を持つ幼児が楽しみながら活動に参加できるようにするための援助や指導の内容、方法、プロセスについて学ぶことの必要性を課題としてあげている。

(4) 安全対策・危険防止（回答数7）

- ①遊びの様子に危険がないか、職員全員で見守っていく。
- ②安全対策。
- ③事故防止策。
- ④安全な環境構成や環境
- ⑤とにかく、怪我をさせないように手を取ったり、あえてハイハイをさせたり、近くの山へ散歩に行ったりと経験できるようにしている。
- ⑥幼児自ら、遊びをする上で気を付けなければならないことに、気付けるような話しかけの工夫。

⑦全体を常に見通し、トラブルにすぐに対応出来るようにする。

安全対策・危険防止については「遊びの様子に危険がないか、職員全員で見守っていく。」「幼児自ら遊びをする上で気を付けなければならないことに、気付けるような話しかけの工夫。」等、幼児の命を守るという意識と共に、具体的にどのように対応していくかについての課題が挙げられている。

安全な環境について、物的、空間的、人的環境をどの様にしていくことがよいのか、具体的な対応については個々の園の状況により異なってくるのが考えられる。園全体で保育者が連携しながら対応しなければならない課題であるが、幼児自身が安全についての知識や体験をもとに、自らの命を守るという視点も大切にしていかなければならないと考える。

(5) 意欲を引き出すための方法 (回答数6)

- ①個人差をなくすための工夫。幼児が思わず動きたくなる「繰り返したくなる」「挑戦したくなる」ように、興味や関心を高めるような遊びの提示の仕方。
- ②個人差(運動機能や理解力)を把握したうえで遊びを進めていくための留意点や配慮点について。
- ③個人差があるので、集団として活動を進めながら、一人ひとりに合わせた指導をしていくことの難しさ。その子の課題となることをどう励まし、どの様に導いていくといいのか、前向きに取り組もうとする気持ちの引き出し方。
- ④動くことが楽しい、疲れてもまたやりたいという意欲につながるような運動遊びを行っていききたい。意欲につながるような声かけ等、一人ひとりに合わせた工夫が必要。
- ⑤初めての取り組みでも「やってみよう」「楽しそう」と思えるように、常に教師が楽しみながら遊びに参加している。しかし、中には楽しさを上手く伝えることができず、子ども達の意欲を引き出すことが難しい。うまく引き出せないことが自分自身の課題である。
- ⑥出来ないことにチャレンジしようとする力を引き出すこと。楽しさを感じ継続、発展できるようにすること。

遊びは幼児自らが様々な環境と主体的に関わりながら行われるものである。意欲を引き出すための方法については「幼児が思わず動きたくなる「繰り返したくなる」「挑戦したくなる」ように、興味や関心を高めるような遊びの提示の仕方。」や「出来ないことにチャレンジしようとする力を引き出すこと。」等、幼児が主体的に意欲的に運動遊びを行うためにはどのような援助や配慮が必要とされるのかについて課題と捉えている。また「個人差があるので、集団として活動を進めながら、一人ひとりに合わせた指導をしていくことの難しさ。」のように、幼児の個人差に配慮し

一人ひとりに合わせた援助の必要性についても課題としている。

IV. 総合考察

1. 幼児の運動遊びの環境の重要性について

幼稚園・保育園・認定こども園それぞれの施設において、幼児の運動遊びの主な活動場所としては、園庭、遊戯室、保育室が考えられる。今回のアンケート結果から、それぞれの空間の特徴を活かした様々な運動遊び行われており、具体的な運動遊びの内容についてもある程度把握することができた。

園庭では設置された固定遊具での遊びや広い空間を活かしたかけっこやリレー遊び、サッカー・ドッジボール、鬼ごっこを中心とした集団遊び、縄遊び等が行われている。

遊戯室においても園庭と同じ様な内容の運動遊びが行われているが、空間の広さから園庭で行われている活動の様子とは異なるものとなることが推察される。また、大型遊具を組み合わせたサーキット遊びや曲に合わせてのダンスや表現遊び等、空間の特徴を活かした活動が行われている。保育室はさらに狭いことから運動遊びはあまり行われず、代わりに幼児が安心して自分の好きな遊びを行うことができる空間としての意味を持つものと思われる。

園庭や遊戯室は全幼児に解放された空間であり、異年齢交流の場となるというメリットもあるが、発達段階の異なる幼児たちの遊びということで、それぞれの遊びの空間の確保、安全の確保が課題となる。

このように各園における運動遊びは、園庭、遊戯室、保育室それぞれの場所の特性を活かして多様な遊びが行われている。幼児期の保育・教育は環境を通して行うということは各要領や指針においても変わらない基本的な考え方である。

幼児の主体的な遊びが生まれ、発展していくためには園内の空間的、物的、人的環境の整備、充実が日常的に行っていくことが求められる。

これには毎日幼児と生活や遊びを共にしている保育者の果たす役割は重要となる。幼児の発達や興味、毎日の幼児の遊びの実態を把握し、課題を探り、保育者同士の情報の共有化を図りながらより良い環境を整えていくことが重要となる。

2. 幼児の運動遊びの課題

保育者が幼児の運動遊びの課題として最も多く挙げているのは、「苦手意識」(回答数15)で、次に「運動遊びの経験(生活経験)不足」(回答数7)、「発達段階に応じた運動遊び」(回答数5)、「遊びの内容・

展開」(回答数5)、「安全確保」(回答数4)、「環境構成・整備」(回答数3)、「運動能力の個人差」(回答数3)となっている。これらの課題は社会的環境の大きな変化が幼児の生活環境にも影響を与え、日常的な生活体験の不足や運動遊びの減少を背景にして起こってきたものと考えられる。

すぐに転んでしまい、手も出さず顔を打ち付ける、3歳でもハイハイができない、5歳児でもブランコが上手くこげない等、先に指摘したように、以前なら日常生活や普段の遊びの中で身につけてきた動きが、十分に獲得できていない現状が窺える。神経系の発達の著しい幼児期に運動遊びを通して多様な動きを身につけることは、運動を調整する能力も高まり自分の体をコントロールすることができ、健康で安全な生活を送ることもつながっていくものと考えられる。

また幼児期の運動遊びは身体的な発育発達を促すだけでなく、仲間と思いきりからだを動かして遊ぶことで、様々なことに意欲的に取り組む態度も養い、有能感の獲得へも繋がっていく。反対に、走るのが苦手だから、縄跳びができないから等、運動が上手くできないことが運動遊びへの意欲や興味を失わせ、苦手意識を持つことに繋がっていることが推察される。またそれは運動体験の差も招き、得意、苦手という二極化が進んでいくことも懸念される。したがって幼児期にこそ自分の好きな、また自分ができる運動遊びを楽しむことができる環境を整え、苦手意識を少なくしていくことが重要になってくる。

保育者は、幼児の運動遊びへ向かう主体的な気持ちを引き出すための環境構成の工夫や、個々の幼児の発達や興味、遊びの状況を見ながら、少しずつ出来るという成功体験を積み重ねることが出来るような遊びの内容やプロセス、援助等への工夫も求められる。

3. 幼児の運動遊びを指導・援助する上での保育者の課題

保育者が幼児の運動遊びを指導・援助する上での課題として挙げたもので最も多いのは「年齢・発達に合わせた活動内容、指導の順序やポイント」(回答数21)である。次に「保育者も共に楽しむ、楽しさを感じる援助」(回答数8)、「苦手意識を持った子への対応・教え方」(回答数8)、「安全対策・危険防止」(回答数7)、「意欲を引き出すための方法」(回答数6)となっている。これらは、幼児の運動遊びの課題で挙げられた内容を踏まえたものとなっている。

先の幼児の運動遊び実態から課題として挙げられたように、運動遊びはできる・できないが見える形で表れてくることもあり、できないことが苦手意識につな

がり、運動遊びへの消極的態度へとようになっていくことが推察される。最も多くが課題と捉えている年齢・発達に合わせた活動内容、指導の順序やポイントについても、ボール遊びやマット、跳び箱、鉄棒などの器械運動遊びの指導においては、初めから幼児にとって難しい活動を行うことは苦手意識に繋がることが考えられるため内容や進め方については工夫していく必要がある。初めにその遊具に触れ、親しみ、自分ができる活動を探す創造的な遊びを繰り返すこと、その中で仲間との交流等により多様な運動を経験しながら、少しずつ自分のできることを積み上げ、自信に繋げていくことが重要である。その結果として調整力や体力だけでなく、意欲や社会性も育って行くものと思われる。

「幼児期運動指針」においても幼児期は生涯にわたって必要な運動の基となる多様な動きを幅広く獲得する非常に大切な時期であり、「動きの多様化」と「動きの洗練化」をあげている。また、幼児期に獲得しておくべき基本的な動きには、「体のバランスを取る動き」、「体を移動する動き」、「用具を操作する動き」が挙げられている。これらの動きは運動遊びや様々な生活体験を通し、やさしい動きから難しい動きへ、一つの動きから類似した動きへと多様な動きを獲得していくことや年齢を経るとともに、無駄な動きが減少し目的に合った合理的な動きができるようになっていくこともあげている。

「子どもの発達に応じて、こういうことができるようになるためには、どう段階を踏んでいったらいいのかを保育者自身が理解して設定したり、保育者の意図を明確にして援助していかなければならない。そのためには保育者自身の運動遊びに対する知識もきちんと持っておかなければならない」との回答にもあるように、保育者の意識によっても幼児の運動遊びは変わってくるものと考えられる。保育者自身が幼児の運動遊びの現状から学び、個々の幼児の発達や興味等を考慮して、幼児が楽しく意欲的に遊ぶことができる物的・空間的・人的環境を整え、幼児と共に活動を楽しみながら援助の仕方も工夫をしていく必要があるものと思われる。

そのためには園内での活動の振り返りや情報の共有化、また様々な研修会などでの学びの機会を得る必要がある。また、われわれ養成校も連携の図り協働して学びを深めていくことも必要と考える。

V. まとめ

1. 幼稚園・保育園・認定こども園それぞれの施設において、園庭では設置された固定遊具での遊びや広い空間を活かしたかけっこやリレー遊び、サッ

カー・ドッジボール、鬼ごっこを中心とした集団遊び、縄遊び等行われている。遊戯室においても園庭と同じ様な内容の運動遊びが行われているが、大型遊具を組み合わせたサーキット遊びや曲に合わせてのダンスや表現遊び等、空間の特徴を活かした活動が行われている。保育室は幼児が安心して自分の好きな遊びを行うことができる空間としての意味を持つものと思われる。

このように各園における運動遊びは、園庭、遊戯室、保育室それぞれの場所の特性を活かして多様な遊びが行われている。幼児期の保育・教育は環境を通して行うということから保育者は園内の空間的、物的、人的環境の整備、充実が日常的に行っていくことが求められる。

2. 保育者が幼児の運動遊びの課題として最も多く挙げていたものは、「苦手意識」で、次に「運動遊び（生活経験）の不足」、「発達に応じた運動遊び」、「遊びの内容・展開」、「安全確保」、「環境構成・整備」、「運動能力の個人差」となっている。幼児の運動遊びの課題については、以前なら日常生活や普段の遊びの中で身につけてきた動きが、十分に獲得できていない現状が窺える。その結果、早く走れない、上手跳べない等、苦手意識を持ち運動遊びに意欲的に参加できない幼児の姿が見られる。保育者は、幼児が自分の好きな、また自分ができる運動遊びを楽しむことができる環境を整え、個々の幼児の応じた援助をしながら、幼児ができた体験を積み重ねて苦手意識を少なくしていくような運動遊びの内容や活動のプロセス等への工夫も求められる。

3. 保育者が幼児の運動遊びを指導・援助する上での課題として挙げたもので最も多いのは「年齢・発達に合わせた活動内容、指導の順序やポイント」で、次に「保育者も共に楽しむ、楽しさを感じる援助」、「苦手意識を持った子への対応・教え方」「安全対策・危険防止」「意欲を引き出すための方法」となっている。これらは、幼児の運動遊びの課題で挙げられた内容を踏まえたものとなっている。

運動遊びはできる・できないが見える形で表れてくることもあり、できないことが苦手意識につながる事が考えられる。また最も多くが課題としていた年齢・発達に合わせた活動内容、指導の順序やポイントについては、幼児が初めに遊具に触れ、親し

み、自分ができる活動を探す創造的な遊びを繰り返すことにより、自分のできることを積み上げることができるよう内容、プロセス、援助を保育者自身が体験的に学ぶことが求められる。

本研究では本学（羽陽学園短期大学）附属幼稚園や認定こども園とそこに勤務する保育者を対象としたもので、対象園や対象保育者が限定されかつ少数での調査研究であった。しかし、保育者が幼児の運動遊びにおける課題についての捉え方や、それらの課題を踏まえ保育者が幼児の運動遊びについての指導・援助するうえでどのような課題を抱えているかについては明らかにすることができたものと思われる。

今後は実際の幼児の運動遊びの様子から、幼児の主體的な運動遊びを引き出すための具体的な環境構成の在り方や運動遊びの指導・援助の在り方について実証的に研究を進めていくことが課題となる。

また、本学（羽陽学園短期大学）以外の幼稚園や保育園、認定こども園での調査を行い、各園の規模や運動遊びの物的・空間的・人的環境、年齢ごとの遊びの実態や課題を探り、本研究結果と比較検討することにより、本学附属園の実態や課題も明確になっていくものと考えられる。このことについても課題となってくると考えられる。

註

- (註1) 文部科学省「体力向上を培うための幼児期における実践活動のあり方に関する調査研究」〈平成22年〉
- (註2) 文部科学省「幼稚園教育要領」〈平成29年告示〉 フレーバル館 2017
- (註3) 厚生労働省「保育所保育指針」〈平成29年告示〉 フレーバル館 2017
- (註4) 内閣府・文部科学省・厚生労働省「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」〈平成29年告示〉 フレーバル館 2017
- (註5) 文部科学省「幼児期運動指針」〈平成24年3月〉
- (註6) 岩崎裕香「幼児期の運動遊びにおける環境構成の重要性及びそのあり方」金沢大学研究紀要, 2008
- (註7) 出村愼一監修「幼児のからだところを育てる運動遊び」杏林書院、2012

SUMMARY

Midori OOKI:

A Study of Preschool Children Reality of the Physical Play Activity and Problem
– The Problem of the Nursery School and Kindergarten Teachers
about Teaching Method in the Physical Play Activity for Preschool Children –

The purpose of this study is to consider the problem of the physical play activity for preschool children in the kindergarten and the center for early childhood education and care attached Uyo Gakuen College.

I conducted a questionnaire on nursery school and kindergarten teachers.

As a result, the problems of the physical play activity for preschool children are weak point awareness to physical play activity and the nursery school and kindergarten teachers felt that it was difficult about the activity contents according to the age and teaching method.

(Uyo Gakuen College)